

左手親指三十六万円也

日野善太郎

前回は、私が平山飯場の振づけにまつたところまで書きました。
 振づけと言えば番頭役ですから、其の会社、商店ならば、背広にネクタイというスタイルで、机の前にいることになるのでしようが、私の場合はそれはありません。
 何しろ、竹中工務店と納谷工務店の下請けのヤブノ建設の、そのまた下請の松本組の、その下請という、次けば飛ぶより平山飯場です。
 背広にネクタイどころか、袖も家らぬ地下足袋姿で現場へ出なければなりません。
 振り方もすれば、コンタリトもうつ、足代も組めば、ハンリ屋の真似もする、そこらあたりは、あくまで土方徳美のままでです。
 そのころ、旭硝子尼崎工場では、突貫工事が強行されていました。
 古い厚板工場をとりこわして、最新設備のオートメー

ション工場をつくるのです。
 早出強要の連続でした。
 突貫工事のため、ケガ人が說出しました。
 無罪に無罪を重ねました。
 理由があるのです。
 別居中は生産がストップするので、早く新工場を完成して、生産を再開しなければなりません。
 それだけでいいのです。
 たいたい、日本の飯ガラスは、三菱系の旭硝子と、三井系の日本板硝子が、その生産のほとんどを占めているのですが、このころになって住友系のセントラル・ガラスがくいでこんで来たのです。
 つまり三大財閥のガラス戦争。
 これに對つために、より良質のガラスを、より低コストで、より大量に、より早く生産しなければなりません。
 そのための新工場なのです。
 そして、突貫強行の理由がもう一つ。

先年、シボレットス工場建設のとき、他の大手業者を尻目に、旭硝子にインシエン鋼の白入、電考の西二船客が頼みました。
 そこに例やらウラがあつたらしく、

「次回の大工事は必ず人入れて」
 という話し合いが、大手業者筋と、旭硝子と、納谷の

三者でかわされたそうです。
 ところが、今度の厚板工場も納谷が工事を請負と決まりました。

「旭硝子のゴイコット」
 を、大手業者が適合して決めたそうです。
 それとはともかく、そんなことがあつての工事だとすれば、納谷としては、大手業者に匹敵する工事をやってみせねばなりません。

それが、無罪に無罪を重ねた突貫工事の強行なのです。
 「メスを握らせー」
 「メスを握らせー」
 そんな落書が便所の壁に書かれました。
 ××とは、納谷の工事主任の名前です。
 恨まれていたんです。恨まれるほどに強引な突貫工事だったのです。

その年、一九六五年十二月中旬。

旭硝子のその現場で、私は左手親指を負傷しました。
 コンタリト打ったこみ中に、長さ二〇センチほどの三本指が再び戻ります。

指の先の骨がサナタのように割れました。
 四十五日も仕事を休んで、やつと治つたと思つたのが、また化膿してさらに三週間、今度こそ全快と喜んだら肩と肝臓の機能障害、

「まことにイカンに存じます」
 なんて、敬語を言つていました。悪いことは重なるもので、敬語のオマケまで張つてきて、どうしようもありません。

指は、尻底も愛ズン兵を、トカえて、トカえて、更に整形してゆきました。
 そんなことで、半年以上を寝てくらして、まったくツいてをいでした。
 労災の休業補償はありましたが、寝て暮しても減代は払われはなりませんし、療養代やら、フコ銀やら、病院へ通り交通費やら、クダじやありません。
 そんな形に助かつたのは、給料ごとに戻される振づけの手当です。
 とところが、そのころから二月間の給料が一回に変わったのです。
 給料日のたびに二日分の給料をもらっていました。しかし、二千五百円だったと思います。
 だから、一ヶ月に二回だとその倍、一回になつても、

合計にして日当四日分になると思つたのは、とらぬ 櫻野
波舟用、こちらがアサハかたつたのです。

新料日にもつたのは、今まで過なのです。つまり、
月二回の給料が一回になつたために、私の手当は半分
へつたわけです。

「正直いって、ガツカリしました。」

そうしていろいろうちに、ようやく治療打ち切りの日がま
した。

「が、悪指は曲りません。」

「くの字」
の形にはなるのですが、それ以上は曲りません。ての
ひらにつかないのです。

打ち切り補償が、一時金としては最高額の二七〇日分、
三十六万円余りですが、こまかい数字は忘れしました。

その金額も、受領する日も内番にしてはいたのですが、
こんなことの知らせるのは早いものです。

「昔やんに大金が入った。」

「アツ」という間に評判になりました。

私が、指の負担などでアラアラしているうちに、松本
別は衰りました。

「ヤブノ屋敷と手を切つたのです。」

「下宿の下敷ではズエに落ちない」

ここで一巻、腰をのびしてやろうと松本親方は考え

近く国土開発の現場事務所もあります。
飯場村と書きましたが、それは他の親方の飯場もあつ
たからで、松本親方は一種だけでした。

多田親方の責任者は平山親父ということになりました。
本田親父が死に、末弟はまだ若くて独身ということだ
から、これ以外は考えられない人選でしょう。

しかし、松本親方は必ずしも、平山親方を最責任者と
は思つてはいなかつたようです。

なるほど、体が大きすぎて押し出しも立派だし、土工事
にくわしいし、体力もあつたし、練むこともあつたし、そう
いう点では申し分はないのですが、それでも松本親方に
はいささかの不安があつたようです。

「あいつは無敵やせし、それこそ身勝手すぎるころもあ
る」

「そう思つていたようです。」

土工の親方に敬愛をなで、とんちを笑ひ草かもしれま
せん。そんなものはこの現場ではむしろ悪徳でしょう。

ただ平山親父の都合は、ふつうよりはガツガツだとい
うにすぎません。

「それにしては既がはすれている」

と、松本親方は思つたのです。

「そうかもしれない。字が読めないから、新聞だつて
写真を見るだけだ。そのために、人との会話がピントは
ずれになることもあります。」

「だからといって、字の読めない人が、みんな非常識と
ようです。」

「かりしも、西武系の大手業者である国土開発が関西に
進出してきました。」

もともと関東の業者である国土開発は、関西に足がか
りをもつるために、下宿業者をさがしてました。
松本親方にとつても、渡りに舟です。
給料を月一回払ひにしたのも、ヤブノから独立する費
金ぐりのためだつたようです。

一方では、そのころ、松本親ぐらゐの浪博の業者では、
まだ勢しかつた重徳組を機嫌的に入れました。

ブルドガー、ハンヤなどを買いこんで、雄鷲土木か
ら国土開発の転身です。

多田親方の達成工事です。

阪急川西線野口から仙勢妙見へ通じる能勢電鉄とい
うローカル色豊かな電車に乗って、四つ目の駅が飯ヶ滝、
その駅の手近く、飯ヶ滝といふところが現場です。

尾崎からではいかにも遠い。通つて通えぬことはい
けれど、マイオロパスなどで送迎するよりは、(国土開発
からの要請もあつたのでしようが) いう七段地に所帯を
懸てようということになりました。

飯ヶ滝から、仙勢川にそつて上流に向うと、南和藤氏
にゆかりの多田神社があつて、さらに川原といふ村と
ころに、手塚空知郎があつて、そこが資料館が準備中
になりました。

「はかざりません。」

「どうも、松本親方にとつて、平山親方は性格があつた
かつたやうなところか、私は悪いやうがないのです。」

平山は身勝手な人間だといふ見方も、立場を説
いたそれは言えないやうでした。

たとへば、あるとき松本親方が自動車事故を起して、
進行中の老人をはねたので、

「みんな出てこい、車に乗れ」

と親方は、飯場の連中をマイオロパスにこみま
した。こゝろに、有無をいわせぬ人です。

「それこそ思ひをこせ」

とられると、これも言葉を左右にして、息子をかく
してしまつたのです。

「あいつ、大けを固執してつてからに、注射がこわい
かすんやから、強の小さい」

そのうえ、人間が身勝手だと思はれているのです。

あとで平山が言いました。

「四で大事な血を他人にやらんのならんや。事故は
自分がしたんやから、自分の血を出したらええん」

どつちが身勝手か考えよう。

「ど、思ひをこせ」

「それは何を言ひますか、それは親者の判定にかまかせして、
私は話を急ぎます。」

松本親方の悪い手癖は的中しました。

多田に行くのについて、平山親父はいくつかの要求を出したのです。

平山親父の要求はいくつかありました。全部はおぼえていません。おぼえていることだけ書きましょう。

——出張手当を出せ。

それが第一でした。尼崎に獲るものと違って、不便な土旅へ行くのだから、料増賃金を払うのが当然だ、というのです。

「どないや、わしが間違つてるか、当り前のことやろが」
平山は若い衆たちに同意を求めました。

「そら、おやっさんの言ひ通りや。なんぼかイロつけてもらわな、行く者いまへんで」

「コラ、松太郎、どや、お前はどう思う」

私はニヤニヤ笑ってました。それは都合のいい話だけど、シブチンの松本親方がそんな要求を呑むだらうか、

そういう要求を出すなら、それなりの話の持つて行き方がある。平山親父一人にまかせていては、なんとも完つかしい。

そういう文脈は、みんなの要求としてオチンとやるべ

「そんな考えとむほどのことか」

松本親方はシブチン承知しました。

「ナ——、ドケムカン代用の五右衛門風呂なら安くつく——と、腹の中で思ひながら、」

「ドケムカンはあかんや」
平山もさる者です。相手の腹を見すかして、先手をうちました。

「む……」

「そんなもん、一人づつしか入れへんし、飯場のもん全量入るんは何時聞かかと思ひ、女はどないならんや。朝の早い女が、しまの風呂に入ったら、めんの互互で廻り入れへんやろが、そないなつたら仕事にあらへんで」
勝ちほこつたように雄弁になると、姐御も七ばかり、オチンと高叫びでまくしたてるのです。

「兄ちゃん、露天風呂はイヤやで。別田のことも、松川のことも行くんやろ。のせかれんように、アンパイ小屋建ててや」

「判った、判った」

閉口した親方は、機嫌をかじつたような顔でうなずきました。

その日はそれですみました。次の日も

「出張手当は——」

きて、平山だけの悪いつきて、平山の顔だけの話し合いでは、ナアナアになるおそれがあると思ひました。

かと思つて、飯場の仲間たちも、親父の尻馬に乗ってワイワイ言つてますが、松本親方の前に出ればシブチン太

郎です。

決して心の底からそう思つてゐるわけではないのです。ヒョッと何かの間違ひでその要求が通ればもうけもの、こは一番、平山親父をヨイシ。して——と、そんな気分です。

私はそういう尻馬に乗る気になれなかつたのです。

実の定、松本親方の目が三角になりました。

「オンドレ、虫のいいことばかりめかすな。」

「何でや、当り前のことやないか。シヤアけど、まあいい。もう一つ頼みたいことがある。」

「何やねん」

親方は背筋を立ててにらみました。

「風呂場をつくつてほしいんぬん」

「ナニイ」

「そない目もむかんかてええやないか。機嫌がない人や風呂がなくて土方が出来るかいや、ええ、そやないか。流りか」

「うーむ」

と、平山親父の再攻めです。

昨夜でも、すっかり話のナリがついたつりりの松本親方は思つて、——

面喰ひながらも腹が立つて——

それでも、すぐ腹を取直したのには、半分はこの再攻めを予期して、返撃を考へていたのでしょう。

「アホか、お前は、多田へ行く者だけ手当をつけたら、尼崎に獲つた者はどないなる。そら不公平やないか」
理由になるような、ならないような、妙な理屈をつけ

て再攻めです。

それが何日も続くのです。

「どそつたれぬ」

松本親方は舌打ちしました。

今、どんななにと思つてるんや。オチンと手を切つて換立しようとしてゐるのは、何とか腹をのばしたいからやないか。ここで一発あてんならんのや。

その為には資金がいる。一機かて無駄づかいしたらア

カンいりこが、この男には丸きり判つてへん。

たまりかねてきたところへ、平山親父はまた新しい要

求を吹っつけたのです。

「また昔のように出函手函を出してくれや」

「出函手函」については説明が必要ですが、

私もそれまでは知りませんでした。

イヤ、私が横づけでなかつたら、その後も知らずにいたでしょう。

それは毎日の出勤者一人について百円づつ支払われる手当です。

勘定しないです、土方一人一人に払われるのでありません。平山親父が受けとるので。

いわば手配料です。

つまり、平山は松本組の中でありながら、人夫出しをしているようなのです。

そういう手当が以前はあって、今はなくなりましたが、飯場の経営が苦しくなっていました。もう一度復活して欲しいと平山はいうのです。

「足もとを見やがって——」

と松本親父が思つたやうか知りませんが。

「兄ちゃん、昔はよく指輪やらネックレスやら、服やら買ってくれたけど、この頃は何も買ってくれへんしな、出函手当でらい出してくれないやんか」

他に誰も知りません。

だから、飯場の仲間たちは、いつの間にか話が立ち崩えになってしまつたぐらいにしか思つてません。

「いつものことっちゃ、平山親父のすることは尻切れトンボや」

とは思つても、ガシに使われたと思う者もいません。

——しかし、

よく考えてみると、うまくやつたのは、平山より松本親父だったのかも知れません。

出函手当を平山が言ひ出したのをモッパンのこととして、出張手当をヤマキにやらせましたのですから。

うまくやつたつもりの平山が、それでなかつたことは、僕でかいかわりてきますが、それはそのときになつてまた書きますよう。

出函手当のことを私だけが知つたのは、横づけだったからです。

毎日の出勤をまとめて月末に請求書を出さねばならぬいから（平山夫婦はそういうことが大の苦手ですから）横づけの私にだけは、打ちあけないわけにはいかなかつたのです。

「昔からのしきたりの光」

と、親父にかわつて如何が説明しました。それがなく

と平山姐御も横から口をはさみます。

亭主も子もある、しかも四〇にもなるうかというオボシの物はだれもすさまじいものですが、これも毎日買められては大丈夫です。

すつたもんだのあげく、出張手当は出さないが、出函手当は出そうということで、一件落着きました。

「ああ、やつぱりそんなことか」

と私は思いました。

かけ回しが成功してトクをしたのは平山親父だけです。今までにも似たことはありました。ヤレ日当を上げるとか、ヤレ汚れ増しを出せとか、そんなことを言ひ出して若い衆を 煽動するけれど、たいていドチン棒にくると裏切るので。

いっしょになつて儲けたり、多少の成果を期待した者は、アホみたいですよ。

とは言え、それでプロゾフという者もありません。

「ダメでもともと」

と、半分は思つているのです。

「平山がワイワイ言うたかて、いっしょに騒ぐことはあ

らへん。松本と平山は身内同士やないか」

と、松本組では古銀の一人も言つていました。

それに出席手当のことは、松本と平山だけの取引まで、

なつたのは、

「僕やんがウチに来たあとかた、その前やつたかな。とにかく、若い衆からもらう取だけやつたらウチは赤字やで。思つてもみや、ウチで賣い物の不平はあらへんやろが」

ホンマかいな、と言いたいところですが黙つてました。

「あのころ、ウチでドロホをつくつて若い衆に売つてたやろ。おぼえてへんか」

そういわれて思い出しました。飯場で金が余ると、よく働いたともしました。だが、別にドロホもつくつて飲ませていました。

たしか、一合二十円ぐらいだったと思います。酒席二段が屋台で五十円ぐらいだったと思ひますから、九しかに安いのです。

しかし、私は飯場のドロホは飲みませんでした。キライだったのでも、不衛生だと思つたわけでもありません。

そのころ（六〇年代のはじめ）まで、ドロホ、ヤミ焼酎など密造酒は珍らしくありませんでした。

どちらかといえば、私はドロホの方が好きでした。それなのに飯場のドロホを飲まなかつたのは、飯代の二重とりをされてはるようでも不快だったからです。

そこら私という人間のへソを走りまわるところです。

そのドブローがいつの間にか世間から影をひそめ、飯場からも姿を消したのには、正気のムートの酒類がふんだんに出回って、世間の意気もよくなったからでしょう。

思えば、一九六五、六年といふのは、東京オリンピックを終り、ベトナム帰還もありという高度成長期のド真ん中だったのです。

話を思わず種にそれました。

「ドブローがつくって売ったの？」

と、世間の話はずつづつと。

「出番がなくなつてヤリヤリが苦しかったからや。あのころはホシヤいろんなヤリヤリをしたんで。借やんなんか知らへんやろが」

と、それから苦勞話がつづきました。

「また兄ちゃんが出戻れるいうから、少しは楽になつてくるやろ」

と、多田へ行くのをたのしみにしている口ぶりです。

その情しそな顔を見てると、平山親父がみんなをダシに使つたとか何となく、そんなことをかめる気もしなくなりました。

そしていよいよ多田へ乗りこみます。

私は松本親父に言いました。

「小屋入りをやらなきゃいけませんね」

「小屋入り？ 何やそれ。」

「昔からの仕業たりですよ。野丁場の飯場に入るとき、エンゼをかついで、御神酒をあげるんです」

「何や、じゃむない。そんな古くさい迷信をかつぐんでお前らしくもないやないか」

一英にふざけました。

「けど親父さん。みんな喜ぶし士気もあがりますよ」

「アホ、みんな、御神酒を飲んでも足る飯やないやないか」

二次会やら三次会やら言つて、明日の朝は、二日酔いが山ほどできるわ。それこそ仕事にならん。そんなアホな金使えろか」

終りの方は、幾ぞせりふめいてサッサと向うへ行きかけましたが、何を思ひ出したか、もう一度もどつてきました。

「お前、大金が入つたつてやないか。小屋入りがわりに、お前が一升買つたれや」

お笑の打切り補償の一時金のことを言っているのです。

目を白黒している私を、面白そうにながめて、今度は、

「多田へ行ってしまいました」

一時金を受取つたのは、多田へ行ってからで、そのときはまだもらっていません。

仲間たちは

「大金が——」

と言いました。私は大金には思ひまでんでした。もちろん、日当千三百円の土工の身で、しかもこれまで

自分の金としては手にしたこともない金ですが、それでも「大金」という感じがしないのです。

それが原が一研買えるとか、何かの商売の資本になる

というのなら、それはまた「大金」と言えるでしょうが、それには思ひません。

だから「大金」では思へません。だが、もしも金を持って金儲けを始めるのですね。

金の型は違つては、いろいろ考えていました。これといった型も浮かんできません。

そのころ、大阪の成る場所——たぶん梅田あたりのお茶屋で、時人の意気風一と出会つたことがあります。

食糧には通れがあつて、どちらも右手の有望視されていた時人です。一人はいつせやこの「労働者救世」にも

原簿を寄せてたところある定売で、若くて可愛らしい小柄な娘さんでした。

もう一人のこれも初々しい感じの青年は魂本明でした。

二ハミもききのこで、名前を知つていて初対面の感じはしませんでした。

話はずんできていろいろに、まだ包帯をしていた私の腕指のことから、一時金のこと話がつりました。

「自費出版で神像を出したら——」

「なるほど、それはいい、そうしようか」

と、へまを少しは書きたためていた私の心が動きまわりました。

「それなら、その時集は——」

と、漢字で「おれ」を言いました。

「英吾所集（この集）ですか」

それで決まりました。

三十六万のうち、一万は神像に、三万は、集に、残りの三十二万は、それが神々思ひつきません、思ひつかないうちに金が入りました。

大金ではないと言ひ、中途半端な金と言ひながらも、実際に手にしてみるとワタワタしました。

まるで足が地につかないのです。フワフワと宙に浮くような心持で飯場に帰ってきました。

途中で酒と魚に寄り、配達をたのみました。

その酒三升と肴が届くのを待つて、仲間たちに、
くわしいことは言わす。

「チャット、嬉しいことがあったんだ。みんなて飲んで
くれ」

とだけ言いました。

「ハハハ」

と願つてうなづく者もいました。たいていは、

「オフ、景気がいいじゃないか」

「自転車の大穴でもあつたんだ」

などと言つていました。

入つた金のわりになす奥いと思つたか、気分がいいと思つたかは知りません。私としてはそうせすにはいられなかつたのです。

ワイワイ言つている仲間たちに笑顔だけ残して飯場を出ました。

平山雄御が道ひかけてきました。

「まあ旦那さん、今夜は帰りませんよ」

この雄御にも何か買つて来ようかと思つていました。

「あんなことせんかてえ夫のに——。みんなそんなときだけやで」

と、雄御は私が酒を買つたことを非難しました。そういえば、前の日にも、

「響ちゃん、一時金が入つても、いくらもちつたとか、いづもらうとか言うたらあかんえ。飯場の連中に金貸せいわれても、いうこときいたらあかんで。性の悪い奴ばかりやよつて、貸したらもどつてけんへんで」

と忠告してくれたのです。

「まさか、それほどお人よしじゃありませんよ」

と、そのときは答へ、今も

「いや、ほんの気持ちですから」

などと、アイマイな返事をして、心が浮かぬ空気の、早く遊びに行きたい意馬心腹からでした。

しかし、世話好きな雄御がいろいろ心配してくれる気持ちを、うるさいなどは決して思いませんでした。

かえつて有益と思つていたので。

何せはからん、

その雄御から、後日、借金を申しこまれようとは、そのときは夢にも思わなかつたのです。

たつた三十六万ぐらいの小金が入つたからといって、どうつてことないと思つていた私は、その場になつてソワソワしている自分を腹立たしく思いました。

その一方で、とにかく一晩さやかに遊んでやれとい

う思いも強く、へさましいことだ、と思ひながら、おとなしく振る気にもなれなかつたのです。

まだ三十代で、政身の男が、遊ぶといえは思いつくのは男と女で、それは当り前すぎることに、ここでもありま

すが、当り前すぎた言ひでもないと言えましよう。

イヤ、一晩の放蕩に、あてもないこうでもないと思ふをこねまわす性格というのが、我れながら情けない次第です。

翌朝は、尼崎の連れ込み旅館で目をさしました。それからアレコレと買物をしたり、借金払ひをしたり。

だいたい私は、小だんから服装にかまわぬ方でした。

同人誌の会とやら、本代やらが、かなりの額になるの、癖る物にまで手が回らないのです。

そのために恥ぢかっせこころいんげんばで、せせから、このさい、服装を整えようと思ひました。

同人誌の会費もたまっていました。原稿一枚にいくらという印刷費の割り当てが、周回になりません。それも払ひました。

飲み屋のツケも少しありました。

それやこれやで、十万円ほどがまたたいてく消えま

つた。もつとも、時集の出版に十万、借金払いと衣服代その

他に十万、当座の小遣いに六万ありといふのは、はじめからの心づもりでもありました。

それが十万円が残りです。貯金といふことも考えま

な。だが、すぐ（情にもないこと）と打ち消しました。

平山雄御にも貯金をテマひられていたのですが、人言われるとかえつてさからいたくなるのが私のくせです。

そして、思いついたのが買草になるようなものを買つて身につけてかくことです。これなら貯金と同じ効果をもち、現金を持つより、いくらか安全だと思つたのです。

私はこの思いつきにコーファンしました。今から思えば、まさきりではなくとも、いささかバカな思ひつきだと

思ふことが、お前になかたかたる笑ひ思ひのことです。で、思いつきの実行に熱中しました。

輸入物の鏡時計とか、タイマーとか、それに男物の金指輪とか、かさばらなくて、金目の物を買ひ集めました。

それをバカけた買物と思ふ意識が心の片隅に、そのときにもありました。別個に金を使うのだからといひ言ひわけも、同じ心の別個にあつたようです。

そして、そうした買物をしていくうちに、

（そりだ、カメヲを買ふ）

と気づいたのです。

これまた、私を夢中にさせる思ひつきでした。

カメラなら買草にちるばかりか、年来の私の夢の一部を果すことになるのです。

私は時や小説を読んだり、書いたりすることも好きですが、それと同じ位に芝居や、映画も好きです。

ずつと若いころには、似たりや仲間と素人芝居の舞台に立つたこともあります。

その団体がつぶれてしまつて、映画に計画だおれにたりました。が、そういう野心というか、好奇心というかは、その後も私の中に残っています。

そしてまた、子供のころ、金持ちの子である級友が得意気にふりかざしていたカメラへのうらやましさの思い出もあります。

それやこれやを思い合わせると、この買物にそれまで気づかなかつたのが、われながら不思議に思われました。

——ここでカメラがあれば——
今まで、そういう場面に出会つたことが何十べんあつたでしょう。

思い立つと、矢もメテもたまたま（それでも初めから高級品は無理だろうと、練習用にヘーフライズのカメラを一台買いました。

思えば、これが私の写真道楽のはじまりでしたが、そのときはまだ、写真のイロへもしらなかつたのです。

カメラを買つても、写し方もしらないのでは話になりません。そこで写真の入門書なども何冊かまとめて買いました。

とにかく、こうして買物をすませて、機嫌よく飯場へ帰ってきましたが、

「善やん、ちよつと」

と、祖母によばれました。

以前は、

「日野ッ」

とか

「善太郎ッ」

とか、ひどいときには

「善ッ」

と呼びかけていた祖母が、そのころから、呼び方が突つてきていました。

もともと、男まさりで気の荒い祖母の、そんな変身ぶり

（祖母も少しは女らしくなつた）

ぐらにしか思つていなかったのですが、気をつけてみると、私以外の者には、以前と変らぬ呼びつけであり、口のきき方の乱暴さのも改まっています。

私にだけが、優しい言葉使いなのです。



それでも、

(今はり、紙づけになつたので、少しばかり笑を使つてくれている)

のだから、としか思ひなかつたのだから、ウカツなことでした。

「一寸の用事によかことなし」

というのは、九州にいたころよく聞いた言葉です。

「チャット聞いてくれ」

「チャット話がある」

「チャット頼む」

などなど、いろいろありますが、チャットという切り出して持たせられた話にしろくことはなから警戒しろということなのでしょう。

さも重大そうに切り出されるより、さも気難そうに話しかけられたときの方が、意外としんどの用件を押しつけられる場合が多いというのは、私自身の経験にもあることでした。

だから耳にタコというほどでないにしろ、聞きおぼえた言葉を思い出して、娘御の

「善やん、チャット」

に警戒すべきだったのに、私は、気難を呼びかけに、気難についていたのです。

部屋には平山親父が、笑顔で待っていました。

さっそく、娘御がお茶をいれてくれます。

めっ先にないことでした。

「どないや。昨夜は赤ちよりらんの本エチャンとええことしてきえか」

「善やんがそないなことするかいな。あんたとちやうわ。オア」

「ナニ、日野で男や。ママ買いらいするわな」

「イナラン、きしやないことばかり言つてからに、善やんはマジメ人間やから、そんなアホなことにゼニ使わんへんて」

ドロホタ一件以来、私は飯場で酒を飲みません。たいていは本を飲んでいるか、原稿を賣っているかでした。

(笑つた奴)

と思われていました。

(酒も飲まないマジメ人間)

とも思われていました。

実は、親父も娘御も知りませんが、外へ出れば飲んでいたのです。それかたまり悪い方で——酒くせも決して

長くありません。

腕力沙汰やら、酒の上のしじりも少くまへのですが、外で飲んで、夜中に七つと帰って寝てしまふので、誰も私の酔った姿を見たとがなないので。

決してネコをかぶつていたとか、ということではなく、なりゆきでそうなつたのです。

飯場では一両も飲まないのに、外では形むるほど飲む、という何だか二重人始めれた自分を人は知られたくなかつたのです。

「親談はさておき——」

と、娘御の口調が少し改まりました。

「大金が入ったからって、下手なニエマッヘンせうがんで、善やんにかきまつてそんなことはないうちやろけど、酒やら女やらバタバタやら、そんなことに金使ひほどアホらしいことはないうつてな。ヘンな女にたまされたりしなさんなや。善やんは人がいいさかいにな」

と、じんわりとお説教です。

「昨夜ふたいたことぜんかて見えんや。飯場の連中だ、酒を飲んで買つたかて、何のトクにならへんで。あいつら、そんなときだけはチャホヤいうも、酔いがさめれば、モトノモチベエや。金は大事にもつてきな」

この部屋に入つてからずっと私は黙つたままです。た

だニコニコと娘御たちの話を聞くだけで。

それにしても、こんな話を聞かすためにだけ私を呼んでのでもしよか。

「日野や、いっばいやるか」

と、親父が、その時立ちかけた。

「アホ、何めかしてんねん。善やんは酒飲まへんやんか」

そこでまた、話の風向が変りました。

「昔はアア、兄ちゃんも営業よかつたから、ウチもいろいろ買つてもろたりしたけど、ここ何年かは苦勞の連続や。ドロホタつくつて売つたりす。善やんやからいりけど、営業もてふ行つたもんや。人間、苦勞せんとな金のありが大株がわかへん。善やんもウカツに人に金貸したらかへん。車場の者なんか、けつこり悪い奴がいるよつてな。誰も貸したらんへんやろな。そう、そんならええぞ」

貸すも貸さぬも、飯場の仲間でそんなことを言つてきたものはいません。もし、そういう人がいたら、そのときどきで済むより仕方がないでしょう。

「兄ちゃん、今度はヤブノから独立したよつて、いろいろ大言やけどな。ここをしのいだら腰のばせるんどちろいか」

と娘御が言えは、平山親父も

「同じ木は建築土木とくらべたら、当りはずれが大きいよってな。傾かるときはドカーンと大きいんや。損するときは大きいけどな」

「そんなもんでか」

「そらそうや、土がつかいか、やわいかは困つてみな判らへんやろが。しゃアけど、これからはもう建築は儲からへんで、建築の土方いうたら、流り方とコンクリだけやろ。建築の廻り方なんてしれたらわ。そんならコンクリはどないや。え、この頃は生コンの天下やないか。もう現場打ちのブランドなんて、お目にかかれへんで。違うや。そんならどないや。現場打ちやからこそ、材料で儲けが出たんやないか」

現場打ちだと、砂やバラスを安く仕入れることで材料代がういてきます。それよりもセメントの方が大きいのです。

と、セメントの運搬一回に三袋必要なセメントなら二袋半、四袋なら三袋というように、節約(といえは耳ざわりがいいけれど、ごまかすといった方が正確です)すれば、たとえぜん一つ確であるに、田地アパートの五階建て程度でも、何十トンものセメント代を浮かすことが出来る。平山は言うのです。

「見てみ、そやからこれからは純土木や。これは損も大

きいが、当ればかれて曲るんや」

「しやから——」

と、そこで廻りが話を引きとります。

「みんなにも、皆やんに頑張つて貰わかんねん。

両方がこけたら元も子もないよってな。ウチもこれで飯のばしたいねん。そんなでなくて、なんでこんな多田くんだけの、水道もないような所へ来るかいな」

「みんなにヤゲンより働いて貰おう思つたら、いろいろ気イ使うてんねんで」

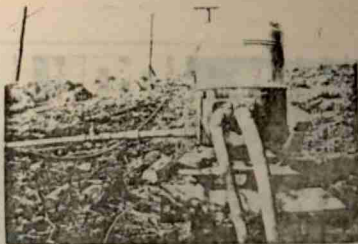
という具合に廻りの話は続きます。

「風呂場も兄ら。んに作つてもろたし、炊事場かて、やがましう言うてあんなだけのもんにしたんや。何せ、ウチは不潔なことが大嫌いやさかいな」

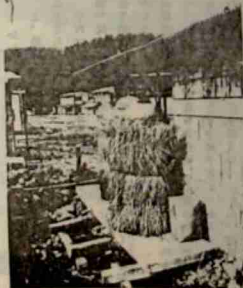
たしかに野丁場の風呂には不つり合いなと言えなくもない炊事場でした。

川西市内といってもここは郊外で、飯場村はそのまた村はずれで、近くは人家もいという場所です。水道が引けない場所なのです。

飲用水も、風呂の水もすぐ近くを流れる能登川からポンプで汲み上げました。



飲料水用ポンプ



夏、日知北はれのを
かまポンペルニのあり

ところが、この水が厄介なシロモノで、ともすれば水
苔がまじるのです。

川の水量が多いときはまだしもですが、少し晴天が続くと、暗緑色の粉末状の水苔が入ってくるのです。川底の水をポンプが吸うからそうなるので、ポンプの位置を変えたり、いろいろやってみましたが、どうやっても同じことでした。

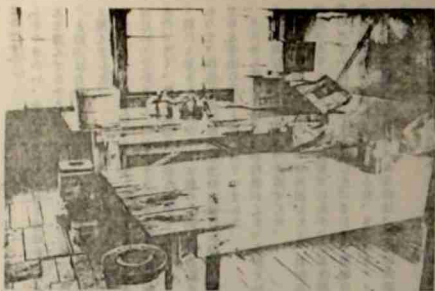
飲用水はロカ儀を使っていることで何とかしのげましたが、風呂の分までは手が廻りません。

おそけにこの水苔は、粉末状なので、すぐポンプをつすらせるので、その度に、断水やら、修理やらで、転手古舞いをさせられました。

水一つと一でも、そんな不便な土地に建てられ、レハブレハブの原場にしては、その牧事場はかなり立派なものでした。

渡しは、飯場仲間元指物師がいて、あり合せの材料ながら、尼崎にあるものより大型で見事なものが出来ましたし、土間は厚くコンクリート固めて、水はけも完全でしたし、尼崎にはなかった調間浄水器はとりつけるし、副食物をいれる棚には網戸をつけるというように、姐御が自慢するだけのことはありました。

「何で七こまでせんならんや、一生住むわけと違うぬ



んど、おか!

と、松本親方が例の苦虫をかみつぶしたような顔を、ことさらしかめて言っただ位です。

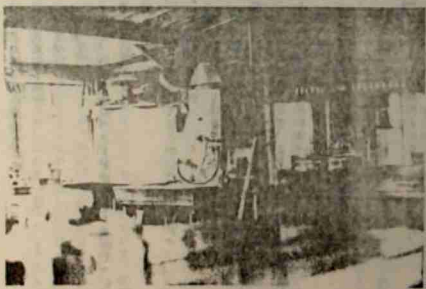
それはそれで。土間のコンクリートはお手のもの、副食棚や渡しは元指物師が腕をふるったといつても、日当を払うのは親方なので、音を上げたくなくなるのも無理ありません。

「布団かてそうや。多田へ来てから新しいのを入れたやろ。実器や炊事道具も大分新しく買ったこんだし、冷蔵庫も新しいなって大きくなったやろが、おかすかて七や、この辺では思うように手に入らんから、週に二日は尼崎まで買出しに行かんならん。そのメタシー代かてバカにならんて!」

どうしてここでメタシー代のことまで出てくるのか、私には理解しにくいのですが、わざわざ尼崎まで買出しに行っているのはウソではありません。

尼崎には、安いのが評判の三和市場という所があって、姐御も昔からそこで買物をしています。だからといって、多田からメタシーで往復したのでは、九まっただものではないはずだ。

それにしても、姐御の長話がここまで進んでも、まだその真意を悟れなかつた私は、そのときどきうかしていた



ようです。

「セやさかい、食べ物で不平を言う者はからんやろ。みんな喜んでるやろ」

と組御は自慢しました。その自慢はおしつけがましく聞えました。

たしかに——多田へ来て食べ物がよくなったと一部の者はいっています。尤、それはもともと平山飯場がいたのでなく、松本飯場から来た連中です。

前にも書きましたが、松本組の労働者は過勤と住込みがある平山の益増とに別れていました。

それなら松本飯場の方が待遇がよかつたかというところ、これが実はそうではなかったのです。

松本の組御は、前かざって外出したり、自動車に学校に通つたりということが好きでした。食事洗濯など家事のためには嫌いのようでした。まして、飯場の若い衆の日常の面倒をみるようなことは、まるきりダメでした。

その松本飯場から来た人たちは、平山の食事は、

「助かつた」

と心から言える程と良かったはずですが、

けれども、それなら平山が豪華なものを食べさせられたかというところ、決してそんなことはありません。

先ほどの長話の中で、

「飯場の若い衆から貸せといわれても——」

と言っていました。借っていたのは組御の方だったのです。

私はなかなばあき、なかなば原を立て、さらには切さいような気分でもありました。

ふつと「取捨時算」のことが頭をかすめました。そのためにさつと見つめた予算が十万円、いま、組御がい出した金額と同じだったからでしょう。

(そんな借金に困っているのだろうか)

まさか、そんなことはないか、と、

しまりに思っていました。

たしかて組御は飯場経営の苦しさを、ムムと語っていた。ドゾロタの話とか——、しかし私はそれを随分平気にか聞いていませんでした。

その同年齢でしたか、息子の高校進学について

「ウラロ入学の——」

手づるを見つげると、私に強く迫つたのは組御でした。あれは、ウツヤ穴跡ではなく、マジメもマジメ、大マジメでした。ことわるのにも困るくらいな迫力でした。あの

金に承目はつけない」

たとえば、星の弁当などは

「明太魚の干物」

「塩サバ」

「明太子」

など、いくつかのメニューが決まっています。もともと

平山にいたる者は

「またか」

と、ため息をつくことがしばしばです。

だから、組御が

「食い物のことではみんな喜んでる」

と自慢するのは、半分ホントで、半分ウソとわいことになるのです。

さて、ここまで来て、ようやく組御は話の結論——

かんじんの條件にたどりついたのです。

要するに

「十万円ほど都合してや」

ということなのです。

まったく

「チヤットの用事によかことなし」です。

近頃、おやん、おやんと呼びかけて、以前のように

「善作」などと呼びつけにしくなつたのもこの一言のためだったのです。

と彼女は大笑を切つたのです。その同じ人が「わすか十万円」を貸せなくて、考えられたいではないですか。それに、多田へ来てから、出金の手当が出るようになって収入もよくなる筈です。

も、この平山組御全員に、松本飯場からも多田へ来ています。しかしがって出金手当は当初の予定より多いのです。何も私が金を貸せといわなくても——。

そういう私の腹の甲を見せかけたように、

「今月から兄ちゃんが出金を出してくれるよって、ウツヤは強くなるはずや。しやけど、その金が入るのは、

まだもう少し先や。セやさかい、ほん、一寸の間やんか、

一月もイハムら返すよって、強かつたと思つたらんやんか」

と言われると(預かつた)でなくて(預けた)だろうな

りなどを思ひながらも、ことわれなくなっていました。

公儀と商談で、半年もブラブラしていたのを、黙認して

くれたというだけでも、飯場としては(看病してくれただか、金を借りただか、特別に生活上の便宜をはかつて

くれたわけではありませんが)嬉しいと言つてよいほどのこと、その点で少しばかり「恩」のようなものも心のどこかで感じていました。

「仕方がない」

ここまで来たら逃げ歩かないのです。銀麩のいう通り
(一時預けるだけ)と、自分に言いかけようようにして、
承知しました。

(これで舞臺はダメになった)

十枚の一万円札を数えながら、つと思ひ、すて、あわ
てて打ち消しました。

(そんなことはない。一ヶ月で返してくれるんだから、
あきらめることはない)

しかし、悪いことはよく出るものです。

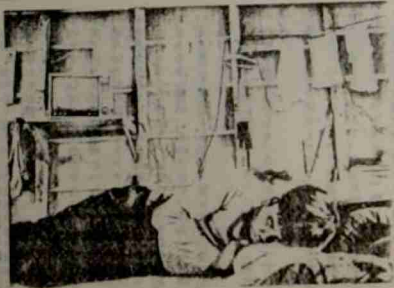
一ヶ月後――

「今月は出戻が出来へんねん。兄ちゃんとの都合が悪いよ
ってナ。来月はきつと返すから」

ということになり、その後も、二万か三万づつぐらい
返してくれたのですが、小さく返ってきた金は、そ
のたびに、なし崩しに消えてしまいました。

銀麩は最後の返済のとき、利息のつもりでしよう。メ
ボンとシヤツをくれました。

が、あのとき立ち消えになつた舞臺の自費出版はその
れなりけりのまま、十数年たつた今も塵の目を見ていま
せん。



歩いて眠れば
秋景の夢

笠ヶ崎の冬の夜を彷彿して 作れる歌、併せて短歌二首

そぞろの 笠のトヤ街、さ夜更け
て 流離の 貴種の子等は 筆枕
軒端 軒端に宿を借り 香つつ 懐れに
く旅衣 破れ 裂れど 引き被り 短
く明け 左おさぶれど 雨は降り来る
くぐ水 降り来る 長き夜を 覆ても
居ら水す 起きても居られず つか
ぶき女して 身ぶるいどして 玉の
飾の 切れんとするを 衣をきりて
身につ 付れども 魂の 残ゆること
なき 冬の夜は 仕く。

旅衣 歌 汚れ破れに吹く風の

寒き路上に 夢も凍れり

天津罪 因津罪かよ この罪は
神さぶる代の母の筆の子の
(1982.1.31)

笠ヶ崎の春に仕事にアアして 作れる歌、併せて短歌二首

四月は残酷な月だ
これは毎年のことだが
今年の特にひどい
いつ迄三月で公共事業が終わり
四月の中頃に仕事が減るのだ
だが 今年
四月に入ったとだんに
全然弱くなった